

### 待機乳児保育室 保護者懇談会

11月25日(金)12時～13時にセンター会議室にて、「保育園入園待機乳児のための保育室」の利用者を対象に保護者懇談会を行いました。

育児・介護支援事業 WG 主査の小西 由紀子先生の司会進行で自己紹介の後、保育士さんが子供たちの日々の生活の様子やそれぞれのお子さんの成長について話しました。保護者の方は昼食を食べながら、子供たちの個性あふれるエピソードや成長ぶりに喜び、保育室で撮影した子供たちのスライドに目を細めていました。その後、保育士さんが、子供たちが大好きだという手遊び「アイアイ」「パンダ、ウサギ、コアラ」を紹介し、保護者の方も一緒にやってみました。最後に、小西先生が保護者の方へ、より良い保育室にするための意見を募り、懇談



会を終了しました。短い時間でしたが、保育室でのお子さんの様子を知ってもらい、保育士の先生と保護者が交流する貴重な時間となりました。



### 平成29年度第1期研究・実験補助者雇用制度の利用者募集

平成29年度第1期研究・実験補助者雇用制度の利用者を募集します。出産・育児又は介護のために十分な研究・実験時間が確保できない研究者に対し、研究又は実験業務(注:教育関係の業務は支援対象外)を補助する者の雇用経費を助成します。本事業は、女性研究者に限らず、育児・介護等に携わる男性研究者も対象となります。

今回の募集について、雇用期間は平成29年4月から平成29年9月末までの間です。応募締め切りは平成

29年1月13日(金)17時必着、選考結果は2月下旬頃に通知する予定です。詳細、申請様式等については、男女共同参画推進センターのホームページをご確認ください。

Web: <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/hojo/index.html>

問い合わせ先:総務部人事課職員掛

(g-e@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)

## 第11回女子中高生のための関西科学塾 JST 女子中高生の理系進路選択支援プログラム

女子中高生のための関西科学塾は、科学技術振興機構（JST）の「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」の一環として関西の大学が連携し、女子中高生を対象に講演会や実験などを行う企画です。第11回目となる今回は大阪大学を中心に、神戸大学、奈良女子大学、大阪

府立大学、大阪市立大学、京都大学などが参加し開催しました。京都大学では、11月20日（日）に13のテーマで実験講座を行い、高校生109名、保護者25名が参加しました。



### ■京都大学での実験一覧

	テーマ	部局	講師
1	地下を“掘らず”に探してみよう！	工学研究科	後藤忠徳
2	DNA とはなにかー DNA に関する基礎実験	理学研究科	朴昭映
3	カオス・フラクタルの世界を知る	情報学研究科	宮崎修次
4	生物のミクロの世界を実体験！ ～身近な微生物を光学顕微鏡・電子顕微鏡で観てみよう～	人間・環境学研究科	幡野恭子
5	私たちは土を食べている	農学研究科	間藤徹・落合久美子
6	高温超伝導を体感してみよう	理学研究科	吉村一良
7	「にじいろ」を見よう	理学研究科	馬場正昭
8	RNA はストレスを感じる？	物質－細胞統合システム拠点	王丹
9	蛍光顕微鏡で細胞をみる、染色体をみる	物質－細胞統合システム拠点	Peter Carlton・佐藤綾
10	DNA・タンパク質1分子を実際に見てみよう！	物質－細胞統合システム拠点	原田慶恵・韓龍雲・多田隈尚史
11	太陽のにじいろを見てみよう	理学研究科	浅井歩・野上大作
12	イケジョ（医系女子）のお仕事：ヒトを科学する！ 「栄養や酸素の行方を追う」	医学研究科	木下彩栄
13	イケジョ（医系女子）のお仕事：ヒトを科学する！ 「ヒトの脳と人の作業活動を科学する」	医学研究科	木下彩栄

## 京大病院 オープンホスピタル

10月22日(土)、京都大学医学部附属病院でオープンホスピタル(病院見学会)が開催され、病児保育室「こもも」がポスター参加しました。

4月に病児保育室の開室時刻が早められた後の早朝の利用状況や、今後も利用しやすい病児保育室にするため、登録者・利用者を対象に保育室の運営状況に関して実施したアンケートの結果を掲示しました。ポスターはセンターのホームページにも掲載しています。



## 岡山大学 管理職セミナー「ダイバーシティ・マネジメント」



11月1日(火)、岡山大学にて男女共同参画に関する管理職セミナー「ダイバーシティ・マネジメント」が開催され、本学の稲葉 カヨ理事・副学長が「男女共同参画推進の現状と課題～京都大学での女性研究者支援を通じて～」と題し、講演を行いました。このセミナーは、岡山大学管理職員の男女共同参画に関する知識の向上と意識の改革を目指して実施されたもので、稲葉理事より、国内外における男女共同参画の現状や、女性研究者を取り巻く状況、京都大学における男女共同参画推進への取り組みや現状について話がありました。

## 大阪サイエンスデイ

10月22日(土)、エル大阪、大阪府立天王寺高等学校にて「大阪サイエンスデイ」が開催され、本学の村山 美穂教授(野生動物研究センター)が講師として参加しました。「大阪サイエンスデイ」は、大阪府内の高校生に対し理科や数学に関する興味・関心を一層喚起するため行う、科学に関する課題研究の発表会で、今回で9回目となります。他校の生徒との交流で互いに刺激を受けながら切磋琢磨し、学習や進路選択に関する意欲を高めるとともに、問題解決やプレゼンテーション能力の育成を目指します。

午前の部は、村山先生が「遺伝子から野生動物をみる～フィールドと実験室をつなぐ～」と題し、講演を行いました。先生自身の経験について、高校生時代から研究生活に至るまで話があり、高校生たちはメモを取りながら熱心に聞いていました。午後の部のサイエンスカフェでは、村山先生に直接話を聞きたいという高校生が集まりましたが、そのほとんどが女子学生となり、様々な質問が寄せられました。ポスターセッションでは、先生が高校生に多数質問をし、研究の第一歩を歩み始めた高校生たちを激励しました。



## 連載：研究者になる！－第59回－

いつか「女性」研究者と呼ばれない日

情報学研究科・准教授 小山 里奈

「研究者になる！」に女性研究者の生き方をテーマとした文章を、という依頼を頂き、実は「あ、また女性研究者としての、だ」と思ってしまいました。依頼頂いたのは、「院生時代以降、どんなことに悩み、どんなことを考えて研究者の道を進んできたのかについて」ということなので、それとは少しずれてしまうかも知れないが、何が「あ、また」なのかということは、女性研究者としてやっていくことと大きく関わらと思うので、その話をしようと思う。

まず、自分自身のことを少し説明すると、京都大学の農学部・農学研究科で学生時代を過ごし、その後、金沢大学自然科学研究科と鳥取大学乾燥地研究センターで博士研究員、いわゆるポスドクのポジションを2つ経験した。現在は、情報学研究科社会情報学専攻の生物圏情報学講座で准教授を務めている。この研究室は様々な生物を対象とした研究を行っている、特に野外で調査をしてデータ収集を行うことが多いのが情報学研究科の中でも他の多くの研究室とは違うところだろう。私自身も国内外のフィールドで生物の調査をしている。この研究室の助手として採用されたのが2004年、その後助教に称号が変わったり、准教授に昇任したり、と立場は変わったが、同じ研究室にもう12年もいることになる。

学生・ポスドクでいた間に、自分が「女子」学生・「女性」研究者である、ということ強く意識したことがあったか？今考えると、実はあまりそんなことはなかった。「女性」研究者を意識したり、「女性」教員としての意見や貢献を求められたりするようになったのは、情報学研究科に当時唯一の女性教員として着任してからだ。

学生の頃は、周囲に普通に女子学生・女性教員がいたこともあって、女性の比率がどれだけか、あまり問題にしたことはなかった。ところが教員となってからは、研究科全体で100人を超える教員のうち女性は現在3名、女子学生の比率も12.5%と京都大学全体での比率の半分程度という現状を事ある毎に意識することになる。まず、着任してすぐに研究科のハラスメント相談窓口担当に。また、女子学生・女性教員が少ない状況の改善を目指して、環境改善について要望を聞いたり、学生同士の交流をはかってもらったりすることを目的に、研究科として女子学生懇談会が開催される。「トイレの個室に棚が欲しい」「女性専用の休憩スペースが欲しい」などここで出された意見から実現したものもあるし、学生同士が知り合ったことがハラスメント対応につながっ

たといったケースもあった。女性教員の懇談会もあって、教員が少ないのだから当然出席者はほとんどが職員だが、ここでも環境改善についての意見が聴取される。何だか色々手厚く扱われている。

しかし、予期していなかったのが、女性教員・女性研究者として、一言挨拶をとか、プレゼンをとか、広報的な活動が求められることが研究科の内外、学内外を問わずちょくちょくあることだ。「〇〇で話をして下さる方を探しているのですが、できれば女性を……」というケースもある。要は、看板に出ている男女比を1:1に近づけるため、サンプリング比率は偏っているのだ。

そんなに頻度は高くない。そればかりやらされてるといふ不平不満を言うほどの負担ではない。でも、何度も繰り返していると、疑問に思えてくることもある。これを引き受けることで、本当にこれが現在の、あるいは将来の女性研究者に役に立つのか？もしかして、「ほら、ここには女性もちゃんといますよ」というトークンになってしまったら、逆効果になりはしないだろうか？それよりも、「女性研究者のため」を目指していいのか？

おそらくこんなことを言えるのは、女性研究者・女性教員が現在よりももっと少なく、想定外としての扱いあるいは反発があった頃に、その中でもやってきた方がおられるからだと思う。男女共同参画推進センターのように、組織として状況を改善しようとされている方達の努力もある。また、研究だけでなくどんな分野でも今問題になっている、結婚・出産・育児と仕事をどうやって両立させていくのか、ということについて、たまたま私個人が今のところ大きな問題を抱えていないということもあると思う。

それでもやはり、最終的に目指す方向は、『女性』といちいち言わないでいい、女性研究者が「女性として」の意見を求められなくなることではないだろうか。大学院生が性別関係なく研究をしていくために必要な環境整備を軽視する訳ではないし、将来大学院生になる人たちを含めて大学や学界の外に向けてメッセージを発する必要があると考えている訳でもない。ただ、その先を、つまり本来の目的を、忘れないようにしなければ、と思うだけだ。私の仕事は研究と教育だ。研究内容にも教育内容にも、私の性別は関係ない。「女性として」の諸々を引き受けるのは、いつか、「女性」研究者と呼ばれない日が来るのに役立つ欲しいからなのだ。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町  
 電話 075 (753) 2437  
 FAX 075 (753) 2436  
 E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp  
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>